

# ボールを使った初級レベルの会話授業への取り組み ーアクティブ・ラーニングを試みてー

多賀 三江子

科目名：会話 1

レベル：初級 ①・2 / 中級 3・4・5 / 上級 6・7・8

履修者数：14 名

## 1. はじめに

筆者は、2019 年秋学期、早稲田大学日本語教育研究センターで初級レベル 1 の会話クラスを受け持った。本クラスの使用教科書は、『NIHONGO Breakthrough From survival to communication in Japanese』（以下 Breakthrough）（キャプラン株式会社 J プレゼンスアカデミー、2015）である。筆者は、かねてより日本語の授業は、学習者を能動的に学ばせることが必要であると考えており、アクティブ・ラーニング（以下 A・L）すなわち「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法」（文部科学省中央審議会 2012）を目指し授業に取り組んでいる（多賀 2020）。本稿では、中村他（2005, p. 22）の「ボールでコミュニケーション」に倣い、会話練習がよりアクティブになるよう行った活動について述べる。

## 2. 実践の方法

中村他は、大学の日本語クラスにおいて、友好的な雰囲気を作ること、また、その中で学習者自身が主体的に参加でき、それを効果的に日本語の習得に結び付けることを目的として、アクティビティを取り入れた教室活動を行っている。そしてその一つとして、「ボールでコミュニケーション」を紹介している。これは、学習者が輪になって、ボールを投げあいながら、自己紹介を行う活動である。このような活動を、中村他は学習者の体と心の緊張をほぐし、リラックスした雰囲気を作るためのアクティビティであると考え、「ほぐすアクティビティ」（p. 17）と名付けている。そして、学習者は「ほぐすアクティビティ」を行うことで、心身ともにほぐれ、さらに学習した日本語を使ってみることで、他者からの関心などを得、自分に自信が持て、楽しく学習を進めることが図れるとしている（p. 12）。筆者はこの活動を『Breakthrough』の Dialogue の会話練習に使用した。例えば、Lesson5 の Dialogue1 「At a Wine Shop」（p. 40）では、本文会話等を練習させた後、全員で立って輪になり、Dialogue1 の一部をパートで交代しながら、発話するように促した。

例 グリーン：「すみません。これは スペインの ワインですか。」

てんいん：「いいえ、イタリアの ワインです。」（Breakthrough, p. 40）

このやり取りを、以下のように行った。まず、最初にボールを持った学生が「すみません。これは スペインの ワインですか。」と発話し、他の学生にボールを投げる。次に、受け取った学生が「いいえ、イタリアの ワインです。」と続け、さらに別の学生にボールを投げる。次に、受け取った学生が、また最初から同じやり取りを繰り返す。このようなやり取りが流暢に続くようになったら、さらに次に続く会話を付け足していき、徐々にやり取りを長くしていった。

この活動の目的は、他の学習者の発話からのインプットに加えて、学習者自らの発話でのアウトプットによって、定型表現の定着を促進することである。さらに学習者同士がボールを投げあうことで、「友好的な雰囲気作り（中村他 2005, p. 10）」を促すように試みた。

### 3. 実践の成果と今後の課題

この活動を行うことで、発話の機会が増え、後のロールプレイ活動でも、「クレジットカードは OK ですか。」「はい、OK です。」(Breakthrough, p. 40) のような定型表現が自然に発話されていると感じられた。また、最初は戸惑っている学習者も見られたが、慣れてくると、自身の話に自主的に置き換えて会話を楽しんでいる場面も見られた。例えば「これは スペインの ワインですか。」を「これは イタリアの ワインですか。」や「フランスの ビールですか。」に言い換えていた。このようなことによって、学習者自らが能動的に活動に参加していたと考えられる。さらに、席を立てて輪になって、ボールを投げあうことにより、学習者同士の距離が、一層近くなったようにも感じられた。しかし、ボールを自由に投げあうことで、特定の学習者にボールが集中し、発話が偏る場面も見られた。今後は、より均等に発話できるように工夫しなければならない。加えて、このような活動以外にも A・L を目指した会話活動の方法を模索していきたい。

### 参考文献

- キャプラン株式会社 J プレゼンスアカデミー (2015) 『NIHONGO Breakthrough From survival to communication in Japanese』 アスク出版
- 多賀三江子 (2020) 「アクティブ・ラーニングを試みた漢字授業の取り組み—YouTube『部首のうた』を活用して—」『早稲田日本語教育実践研究』8, 51-52.
- 中村律子・浅見かおり・金子広幸・宮崎妙子 (2005) 『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ 50』 アスク出版
- 文部科学省中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）用語集」  
 < [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf) > (2021 年 2 月 3 日閲覧)

(たが さえこ, 早稲田大学日本語教育研究センター)